

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720027

研究課題名（和文） ヘレニズム・ローマ期の哲学における「運命」論の全体像

研究課題名（英文） Survey of the Theories on Fate in Hellenistic and Roman Philosophy

研究代表者

近藤 智彦（KONDO TOMOHIKO）

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30422380

研究成果の概要（和文）：本研究は、ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命と自由意志に関する諸理論と論争の全体像を検討した。その主要な成果としては、ストア派や新プラトン主義の運命論と自由論がもつ思想的・哲学的な意義をめぐる複数の論文や学会発表、プロクロス『摂理、運命とわれわれ次第のものについて』の日本語初訳（田子多津子氏との共訳）のほか、西洋哲学史シリーズ本の一章におけるヘレニズム哲学の解説があり、また研究書の公刊に向けて準備を整えた。

研究成果の概要（英文）：This project has surveyed the theories and debates on fate and free will in Hellenistic and Roman philosophy. The main research achievements include several articles and conference presentations on the historical and philosophical significance of the Stoic and Neoplatonic theories of fate and freedom, the first Japanese translation of Proclus' *De providentia et fato et eo quod in nobis* (jointly with Tazuko TAGO), and a chapter presenting an outline of Hellenistic philosophy in a book series on the history of Western philosophy; a monograph based on this research is also in preparation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：思想史、西洋古典、哲学、倫理学

1. 研究開始当初の背景

運命と人間の自由意志との相克の問題は、西洋哲学史上ヘレニズム・ローマ期に初めて主題的に取り上げられた。この論争の出発点となったのは、「あらゆるものが運命に即して生じる」とするストア派の運命論である。この運命論をめぐる、ヘレニズム期から古代末期にかけて、賛否双方の立場から多くの

議論が展開されたのである。その焦点となったのは、人間のいわゆる「自由意志」にあたるものが、運命論によって否定されてしまうのではないかという問題であった。これは、現代に至るまで論じ続けられている決定論と自由意志の問題の歴史的起源と言え、思想的にはもちろん哲学的に見ても興味深い論争を構成している。

この論争における個々の哲学者や学派の議論については、本研究開始時点ですでにかなりの研究の蓄積があった。まずストア派の運命論と自由論については、Susanne Bobzien, *Determinism and Freedom in Stoic Philosophy* (Oxford, 1998)が、従来の研究水準を大きく引き上げた。また、自由意志問題に関係するエピクロス(派)のいわゆる「原子の逸れ」の学説についても、David Furley, *Two Studies in the Greek Atomists* (Princeton, 1967)や、David N. Sedley, 'Epicurus' refutation of determinism', in *ΣΥΖΗΤΗΣΙΣ: studi sull'epicureismo greco e romano offerti a Marcello Gigante* (Napoli, 1983), 11-51 が、それぞれ個性的な解釈を提示し、その後の研究を活性化させた。さらに、ストア派の運命論の主要な資料であるとともに、運命論に対する哲学的な批判を展開している二つの重要な著作、キケロ『運命について』とアフロディシアスのアレクサンドロス『運命について』については、いずれも Robert Sharples が信頼できる校訂と翻訳・註釈を公刊し、研究の進展に貢献した (*Cicero: On Fate and Boethius: Consolation of Philosophy IV.5-7, V* (Warminster, 1991)、*Alexander of Aphrodisias: On Fate* (London, 1983))。しかし、ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命と自由意志に関する諸理論と論争の全体を、横断的に一貫した視点から論じた研究は世界的にもまだ見られなかった。類似の研究としては、Richard Sorabji, *Necessity, Cause and Blame* (London, 1980)や Albrecht Dihle, *The Theory of Will in Classical Antiquity* (Berkeley, 1982)があるが、いずれも特にストア派の扱いにおいて不十分と言わざるをえず、近年の研究成果を取り入れた根本的な再検討が求められていた。

本研究代表者は、すでにこの主題の一部に関わる研究成果を博士論文にまとめたほか、学術雑誌などを通して発表してきた。その中で検討がなされていたのは、ストア派の運命論と自由論の詳細、エピクロス(派)の「原子の逸れ」の学説、キケロ『運命について』の中で紹介されるアカデメシア派カルネアデスの議論、アフロディシアスのアレクサンドロス『運命について』における運命論批判などである。しかし、ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命と自由意志に関する論争の全体像を解明するためには、いまだ検討すべき課題が残されていた。その主なものを挙げると、(1)新プラトン主義における運命論と自由論の検討、(2)古代哲学における「(自由)意志」概念の検討、(3)ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命論と自由意志論の思想史的・哲学的な意義の解明、の三つであった。

2. 研究の目的

本研究は、ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命と自由意志に関する諸理論と論争について、これまでの研究成果を踏まえつつ全体的に検討した上で、その思想史的・哲学的な意義を解明することを目的とした。その研究成果については、個々のトピックに関する専門的研究を論文や学会発表を通して公表するとともに、まだ日本語訳のない原典の翻訳を発表し、さらにその全体像を一貫した視点から論じる研究書の出版も目指すものとした。

古代ギリシア・ローマ哲学の一つの頂点がプラトンとアリストテレスにあることは否定できないが、ヘレニズム・ローマ期になって初めて明確に主題化されるに至った哲学的問題が多いこともまた事実である。運命と人間の自由意志の相克の問題も、その一つとして挙げられるだろう。そこで本研究では、専門的な研究論文だけでなく、まだ日本語訳のない重要な原典の翻訳も発表することで、日本におけるこの分野の研究の突破口を拓くことも目的の一つとした。さらには、古代哲学の中でプラトンやアリストテレスに比べると一般にはよく知られていないヘレニズム・ローマ期の哲学について、その正確な知識と思想史的・哲学的な意義を伝えることも併せて目指した。

本研究では、運命論を肯定するストア派と、ストア派の運命論を批判する他の主要な立場の諸議論をそれぞれ検討した上で、その対立の根幹がどこにあるのかを見定めていった。その論争は存在論、自然学、倫理学、論理学など広範の分野に亘るが、その中心にあった関心は世界における人間の位置の捉え方であり、またそれに基づいて考えられる善き生き方への問いであったことが明らかになるだろう。「運命」という概念は古代的なものであっても、この問い自体はいつの時代の人間にとっても普遍的なものであると言え、それに根源的かつ総合的な視点から向き合った点で古代哲学の思索は際立っている。世界における人間の位置を真正面から問い、それに基づいて人の生き方を考えた古代哲学の議論は、哲学的思索の本来の姿を指し示すものとなると期待される。

3. 研究の方法

(1)新プラトン主義における運命論と自由論については、この主題を包括的に論じたプロクロス『摂理、運命とわれわれ次第のものについて』を中心に、プロティノスなど他の新プラトン主義者の議論をも参照しつつ検討する。同時に、新プラトン主義の専門家である田子多津子氏(秋田大学教育文化学部非常勤講師)の協力を仰ぎ、プロクロスの同著

作の日本語への翻訳・訳注を完成させる。

(2)古代哲学において「(自由)意志」という概念がどの段階で成立したのかをめぐっては、これまでも様々な解釈が提案されてきた。この問題については、そもそも前提となる「(自由)意志」概念についての共通理解がないため決着をつけるのは困難であるが、本研究の成果から論じられる範囲内で何らかの見解を提示する。

(3)ヘレニズム・ローマ期の哲学における運命論と自由意志論の思想的・哲学的な意義に関しては、まず個別的な研究として、ストア派の「運命」概念の前史の検討とともに、ストア派の自由意志論と近現代の議論との比較を行う。その上で、その諸理論と論争の全体像を、横断的に一貫した視点から論じることを試みる。

4. 研究成果

(1)新プラトン主義に関しては、運命と自由の問題をめぐる新プラトン主義とストア派の間の影響関係や異同をプロクロスの議論を出発点として詳細に検討し、『新プラトン主義研究』誌上に論文「ストア哲学と新プラトン主義の間——プロクロス『摂理について』から——」として発表した。「運命」をこの宇宙全体を統御する「自然」と同定するプロクロスの理解は、明らかにストア派の伝統に依拠している。しかし、ストア派がこの宇宙を全存在とみなしたのに対して、プロクロスはこの宇宙を超越する存在があることを強調する。この点は、ストア派の倫理がこの世界での実践に価値を見出し「運命愛」を説くのにに対して、新プラトン主義の倫理がこの世界を超越する存在に関わる観想を重視するという、周知の違いに重なるだろう。さらにプロクロスは、プロティノスが説いた「理想としての自由」と同時に、アフロディシアスのアレクサンドロスが説いたような「責任の前提としての自由」である「選択の自由」をも、運命から救おうとする。そのためプロクロスの議論は込み入ったものとなっているが、それはストア派以来の諸理論を一挙に統合しようとした試みの代償であったと言えよう。

以上の論文で主要な資料としたプロクロス『摂理、運命とわれわれ次第のものについて』については、日本語による翻訳・訳注を田子多津子氏と共同でまとめた。その前半部は『新プラトン主義研究』誌に掲載され、後半部も引き続き同誌に掲載されることが決まっている。本作品はプロクロス『三つの小品』の第二篇にあたるが、『三つの小品』のギリシア語原文は失われており、ムールベケ

のグイレルムスによるラテン語訳のみ遺されている。したがって、本テキストの解釈に際してはグイレルムスのラテン語訳の特徴を考慮に入れる必要があるが、この点に関しては、詳細な注を付した Carlos Steel, *Proclus: On Providence* (Ithaca/New York, 2007)が画期的な研究と言え、われわれの日本語訳に際してもそうした最新の研究成果を取り入れることにより正確な解釈を期した。

(2)古代哲学における「(自由)意志」概念の検討に関しては、本研究期間中に Michael Frede, edited by Anthony A. Long, with a foreword by David Sedley, *A Free Will: Origins of the Notion in Ancient Thought* (Berkeley/Los Angeles, 2011)が出版され、その書評を『西洋古典学研究』誌において担当する機会を得たので、それを通して本研究成果に基づくアプローチを試みた。かつて Albrecht Dihle, *The Theory of Will in Classical Antiquity* (Berkeley, 1982)は、「(自由)意志」概念はギリシア哲学とは異質のユダヤ・キリスト教思想を背景として、アウグスティヌスの段階で形作られたと説いたが、これに対して Frede は、「自由意志」概念の起源をストア派に見る。Frede の言う意味での「自由意志」概念が、ストア派以来の伝統に依拠するものであることは確かであろう。しかし、後にアフロディシアスのアレクサンドロスらの段階で「われわれ次第」と重ねられるに至った「自由」概念を、Frede が論じるように、ストア派元来の「自由」概念の単なる変容として説明できるかどうかは疑わしく、むしろそこに「自由意志」概念の起源を見る可能性もあることを示唆した。

(3)ストア派の「運命」概念の前史に関しては、ストア派の「運命」概念が主に初期アカデメイア派とエピクロス派から影響を受けて形成された可能性が高いことを明らかにし、論文「ストア派の「運命」概念の起源を辿る」にまとめて論文集『西洋古典学の明日へ』に寄稿した。その結論を図式的にまとめるならば、ストア派の「運命」概念は、知性ないし神による世界の統御というアカデメイア派ゆずりの考え方を、エピクロス派にも通じる唯物論的な因果のうちに捉えるという、その交叉において成立したと言えるだろう。

ストア派の自由意志論と近現代の議論との比較としては、まず、自由意志と目的論の問題に対するストア派とスピノザの両者の立場を和解させる解釈の可能性を探り、その成果をスピノザ協会総会での講演「自由意志と目的論の帰趨——ストア哲学のスピノザ的解釈の可能性」の中で発表するとともに、本講演の内容に基づく論文「自由意志と目的

論の帰趨——ストア派とスピノザ——」を同協会誌上に寄稿した。ここで特に自由意志と目的論の二つの問題を取り上げたのは、類似性が指摘されることの多いストア派とスピノザの両哲学の間で、これらがいずれも一見したところ重大な相違を示しているように思われる点だからである。本論文で追求したのは、この二点についても両者が実際には同じことを言わんとしていたのではないかという解釈の可能性である。その試みを通して、もはや時代遅れにも思われるストア派の目的論的世界観とそれに基づく倫理の教説を、スピノザ的に、さらには現代的に、再解釈する可能性がなお開かれていることを確認した。

また、日本倫理学会における自由意志問題をめぐる討議において「ストア派の三つの顔」と題する提題を行い、ストア派の立場を現代的な問題関心と絡めつつ論じ、その両立論の与える示唆が現代でもなお有効であると説いた。なお、その後の再検討を踏まえて論点を整理した報告を、後日同学会誌に発表している。ここで採られたのは、ストア派(特に初期ストア派のクリュシッポス)の立場を解釈する試みに重ねて、自由意志問題の適切な解決を模索していくという道である。ストア派の立場は元来、決定論と自由意志が両立するとみなす両立論であったと言えるが、ときに非決定論的自由意志論とも自由意志否定論とも見られてきた。この二つの仮面を剥ぎストア派の元来の顔を取り戻す中で、自由意志問題の最も穏当な立場と考えられる両立論を擁護するために現代のわれわれが取り組むべき課題が明らかになる。具体的には、意識的であることを要件としない新たな「自由意志」理解の模索、〈物理的／心的〉ないし〈因果性／合理性〉という区別自体の根本的な再検討、「運」の不可避性を認めた上での「倫理」の構想と、それと連動する意味での「自由意志」概念の再確立である。

さらに本研究に関連して、西洋哲学史シリーズ本の一章においてヘレニズム哲学の解説を担当した。そこでは、ヘレニズム哲学の具体的な議論を、通常のように学派ごとに解説していくのではなく、認識論・自然学・倫理学の三分野ごとに、エピクロス派・ストア派・アカデメイア派を横断しながら概観するという方針をとった。その全体を通じて、公共に開かれた論理に基づいて、どこまでも「地に足のついた」議論が展開された点こそ、ヘレニズム哲学の最大の魅力を形作るものであると説いた。本研究の成果も反映させたこの解説を通して、ヘレニズム・ローマ期の哲学について、その正確な知識と思想的・哲学的な意義を伝えるという本研究が目指していた目的の一つを果たすことができた。

また、本研究に関連するヘレニズム・ロー

マ期の倫理学についても、ストア派のクリュシッポスによるプラトン『国家』の正義論の受容に関する研究を、国際プラトン学会において発表した(‘Chrysippus’ criticism of the theory of justice in Plato’s *Republic*)。さらに、アカデメイア派のカルネアデスの反正義論をやはりプラトン『国家』の受容と絡めて論じた研究を、ギリシャ哲学セミナーにおいて発表し、それに基づく論文を同会誌上に発表した(「カルネアデスの反正義論の射程」)。また同内容の報告は、ソウル大学での国際研究会においても行った(‘On the Plank of Carneades’)。これらの研究を通して、ヘレニズム哲学においてプラトン『国家』の正義論が積極的に受容されたことを明らかにするとともに、特に本研究の主題との関連では、彼らの倫理学の中心的な関心がこの世界の生における幸福を求める格闘にあったことを示した。

最後に、本研究の集大成としては、一般向けの解説書を執筆するという当初の計画を発展させ、研究書の公刊を目指すことになった。その準備は着実に進んでおり、2012年度中には出版される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 近藤智彦「【書評】Michael Frede, edited by A. A. Long, with a foreword by David Sedley, *A Free Will: Origins of the Notion in Ancient Thought*. Pp.xiv+206, Berkeley/Los Angeles, University of California Press 2011」『西洋古典学研究』60、2012年、168-170頁、査読無
- ② 近藤智彦「カルネアデスの反正義論の射程」『ギリシャ哲学セミナー論集』8、2011年、25-37頁、査読無
- ③ 近藤智彦「自由意志と目的論の帰趨——ストア派とスピノザ——」『スピノザーナ:スピノザ協会年報』10、2010年、55-79頁、査読有
- ④ 近藤智彦・田子多津子「【翻訳】プロクロス『摂理、運命と自由について』(前)」『新プラトン主義研究』10、2010年、113-139頁、査読有
- ⑤ 近藤智彦「ストア派の三つの顔(日本倫理学会第60回大会・主題別討議報告「自由意志の可能性」実施責任者・宇佐美公生)」『倫理学年報』59、2010年、48-51頁、査読無
- ⑥ 近藤智彦「ストア哲学と新プラトン主義の間——プロクロス『摂理について』から——」、『新プラトン主義研究』9、2009

年、5-25 頁、査読有

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① Tomohiko Kondo, ‘On the Plank of Carneades’, Global COE - CARLS International Symposium: Philosophy and Rhetoric in Ancient Greece and Rome, 2011 年 2 月 23 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）
- ② 近藤智彦「カルネアデスの反正義論の射程」第 14 回ギリシャ哲学セミナー、2010 年 9 月 11 日、中央大学多摩キャンパス（東京都八王子市）
- ③ Tomohiko Kondo, ‘Chrysippus’ criticism of the theory of justice in Plato’s *Republic*, International Plato Society, IX Symposium Platonicum, 2010 年 8 月 6 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）
- ④ 近藤智彦「ストア派の三つの顔（主題別討議「自由意志の可能性）」日本倫理学会第 60 回大会、2009 年 10 月 17 日、南山大学名古屋キャンパス（愛知県名古屋市）
- ⑤ 近藤智彦「自由意志と目的論の帰趨——ストア哲学のスピノザ的解釈の可能性」スピノザ協会第 20 回総会、2009 年 5 月 9 日、明治大学駿河台キャンパス（東京都千代田区）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 近藤智彦「ヘレニズム哲学」神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史 II——「知」の変貌・「信」の階梯』講談社、2011 年、33-95 頁
- ② 近藤智彦「ストア派の「運命」概念の起源を辿る」大芝芳弘・小池登編『西洋古典学の明日へ——逸身喜一郎教授退職記念論文集——』知泉書館、2010 年、215-233 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

近藤 智彦 (KONDO TOMOHIKO)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30422380

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし